

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 2 部門第 6 区分

【発行日】平成 27 年 6 月 11 日 (2015.6.11)

【公開番号】特開 2014-101137 (P2014-101137A)

【公開日】平成 26 年 6 月 5 日 (2014.6.5)

【年通号数】公開・登録公報 2014-029

【出願番号】特願 2012-254954 (P2012-254954)

【国際特許分類】

B 6 5 D 41/04 (2006.01)

B 6 5 D 55/16 (2006.01)

【 F I 】

B 6 5 D 41/04 D

B 6 5 D 41/04 G

B 6 5 D 55/16

【手続補正書】

【提出日】平成 27 年 4 月 16 日 (2015.4.16)

【手続補正 1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 2 3

【補正方法】変更

【補正の内容】

【 0 0 2 3 】

この閉栓過程終了からの閉栓過程について、図 13 乃至図 18 を参照して説明すると、図 13、図 14 の如く、キャップ部 2 を閉栓回転 R (平面からみて時計廻り)させると、回転途中において、突起部 5 の基端部に垂下部 2a の側面が当接し、リング部 3 はキャップ部 2 の閉栓回転 R に連れ廻りされ、この際、螺旋部 1a のリード角の存在により、図 15 から図 16 の如く、嵌脱突起部 5 と突起部 5 とが接触しない状態でキャップ部 2 は閉栓回転 R しながら降下し、あるいは、図 17 の如く、嵌脱突起部 6 と突起部 5 とが折衝したとしても、図 18 の如く、リング部 3 はキャップ部 2 と連れ廻りすることになり、図 6、図 7 の如く、キャップ部 2 の上壁内面と容器体 1 の口部 K の上端面とが衝接し合い、キャップ部 2 とリング部 3 とは干切破断部 S を境に対向して閉栓過程が終了する。

【手続補正 2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 2 4

【補正方法】変更

【補正の内容】

【 0 0 2 4 】

そして、この閉栓過程終了後におけるキャップ部 2 の不測の開栓回転 L を阻止するロック過程及び解除過程について、図 19 乃至図 25 を参照して説明すると、図 19、図 20 の如く、リング部 3 を回転操作 M (平面からみて時計廻り)させると、リング部 3 の突起部 5 は突起嵌脱部 6 の薄肉溝部 H を経て嵌脱孔部 6a へと進入し、このとき突起嵌脱部 6 の薄肉溝部 H は弾性拡張変形し、及び、突起嵌脱部 6 が備える垂下部 2a の片持状態により弾性反り変形し、図 21、図 22、図 23 の如く、突起部 5 は突起嵌脱部 6 に嵌着されてロック状態とされ、このロック状態において、キャップ部 2 を、図 8 に示す開栓回転 L させようとする、と、リード角の存在によりキャップ部 2 は開栓回転 L しつつ上昇し、これによりキャップ部 2 に形成された突起嵌脱部 6 の嵌脱孔部 6a の下内面と突起部 5 の底面とが衝接し合い、キャップ部 2 の開栓回転 L が阻止されることになる。

【手続補正 3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0030

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0030】

この第二形態例にあっては、上記キャップ部2の上記垂下部2aを除く周囲部分に垂下周壁部2b・2bを形成しているから、キャップ部2の垂下部2a・2a及び垂下周壁部2b・2bが環状に連続して存在することにより、キャップ部2に垂下部2aが垂設されている特異な形態に比べ、全体形態から生ずる違和感を無くすることができ、又、上記垂下部2a・2a及び垂下周壁部2b・2bの直径をキャップ部2の直径より大きくすることによりキャップ部2の回転操作を容易に行うことができる。